貝塚市埋蔵文化財調査報告　第45集

海塚遺跡発掘調査概要

1998.3.31

貝塚市教育委員会

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第45集

海塚遺跡発掘調査概要

1998.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

海塚遺跡は今回の開発行為に伴う確認調査によって新たに発見した遺跡であります。

今回、発掘調査のメスが入り、本遺跡の歴史を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査概要報告書として刊行する運びとなりましたことは、先人の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成10年3月31日

貝塚市教育委員会
教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は、大阪府貝塚市海塚68－2他地内に所在する、海塚遺跡において実施した礼拝堂建設工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．確認調査は平成8年5月10日に実施し、第2次発掘調査は平成9年1月13日から3月31日にかけて実施した。内業調査は平成9年11月30日に終了した。

3．調査にあたっては、創価学会より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、調査員松本武志が担当し、学芸員三浦　基が補佐した。
　現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。
石野貴史　　尾越功一　　奥野洋一　　山本　睦　　米子千智

5．本書の編集は松本が行い、執筆は第1章を前川、その他を松本が行った。

6．遺物写真撮影は米子千智が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

8．遺物整理にあたっては、森村健一氏、嶋谷和彦氏（堺市立埋蔵文化財センター）にご教示いただいた。記して感謝の意を表す。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
第３章　調査成果 …… 4
　１．調査の概要 …… 4
　２．基本層序 …… 4
　３．検出遺構 …… 5
　４．出土遺物 …… 9
第４章　まとめ …… 13

図　版　目　録

図版１　検出遺構
　航空写真
図版２　検出遺構
　１　全　　景
　２　同　　上
図版３　検出遺構
　１　SD - 6001
　２　同　　上
図版４　検出遺構
　１　SD - 6002、SD - 6003
　２　同　　上
図版５　検出遺構
　１　SD - 6002、SD - 6003
　２　同　　上
図版６　検出遺構
　１　SD - 6002、SD - 6003
　２　同　　上
図版７　検出遺構
　１　SX - 6001
　２　同　　上
図版８　検出遺構
　１　SX - 6004
　２　同　　上
図版９　検出遺構
　１　SX - 6005
　２　SX - 2103
図版10　検出遺構
　１　SX - 2102
　２　同　　上
図版11　出土遺物
　SX - 6004(11),SD - 6001(1,2,3),SX - 6005
　(7,8,9), SX - 6001 (10)
図版12　出土遺物
　SD - 6001(4),SX - 2103(5,6), SK - 2103(12),
　包含層第32層(14),包含層第11層(15),包含層
　第23•24層(16),包含層第10層 (17)
図版13　出土遺物
　田耕作土(18),青花(19～21),現代磁器(22,23)
図版14　出土遺物
　石製品

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　基本土層柱状図
図５　最終面遺構配置図
図６　出土遺物

第1章　調査に至る経過

大阪府貝塚市海塚68－2他に所在する製粉工場跡地において、礼拝堂建設工事の計画が持ち上がり、埋蔵文化財確認調査の依頼書が提出された。

建設予定地は周知の遺跡外であったが、水間街道に接した地点であり、周辺の中世遺跡の状況からみて埋蔵文化財が包蔵されていることが十分考えられる地点であった。

そこで、関発者と貝塚市教育委員会との間で協議を重ねた結果、埋蔵文化財の有無の確定と既設建物基礎による地下の破壊状況確認を目的として確認調査を実施することの合意をみた。

確認調査は既設建物以外の敷地北半部分において、北、南2ヶ所（面積54㎡）の調査区を設定し、平成8年5月10日に実施した。調査の結果、南側調査地区においては遺構等は存在しなかったが、北側調査区では中世の遺物包含層、遺構が存在し、また、既設建物基礎による破壊は及んでいないことが判明した。

この結果をもとに、遺跡発見届出書の提出を求め、関発者と埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、今回の建設行為によって破壊を受ける部分982㎡について第2次発掘調査を実施することの合意をみた。

遺跡発見届出書提出後、開発予定地の大字「海塚」から遺跡名を海塚遺跡と命名し遺跡登録処置を行った。

発掘調査期間は平成9年1月13日から3月31日にかけてである。

19.泉州麻生塩壺出土地　20.堀遺跡　22.貝塚寺内町遺跡
23.加治・神前・畠中遺跡　29.新井・鳥羽遺跡　59.石才遺跡　67.今池遺跡
75.新井・鳥羽北遺跡　80.津田遺跡　82.福田遺跡　94.堀秋毛遺跡
97.東遺跡　110.海塚遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

第2章　位置と環境

今回発掘調査した海塚遺跡は南海本線貝塚駅の南東約450mに位置する。本遺跡の北東側周辺は住宅が密集しており、南東側周辺に住宅地に囲まれるように農地が残っている状況である。これからさらに農地が開発によって減っていき、埋蔵文化財が破壊されることは確実である。本遺跡は北に流れる津田川と、南に流れる近木川に挟まれた海抜約15.0mを測る中位段丘上に位置する。最近の調査例として本調査区より北西約22m地点において立会調査を実施した際に中世の掘立柱建物を確認している。周辺には中世の遺構が確認されており、調査地との関連する成果が期待された。今回の調査地は本遺跡の東端に位置し、西側には集落が拡がる様子が窺える。

本遺跡の周りには古墳時代から室町時代の集落跡が確認されている加治・神前・畠中遺跡、戦国時代から江戸時代に栄えた貝塚寺内町遺跡、海塚遺跡と隣接する中世の集落跡である堀秋毛遺跡、中世の集落跡である福田遺跡、中世から近世の生産遺跡である東遺跡、中世から近世の集落跡である新井・鳥羽北遺跡、弥生時代の散布地であり、室町時代の集落跡が確認されている新井・鳥羽遺跡、平安から近世の集落跡である小瀬遺跡、古墳時代から室町時代の集落跡である堀遺跡、近世の窯跡がある津田遺跡、近世の散布地である堀新遺跡、縄文・平安～中世の散布地である石才遺跡、弥生・古墳時代の散布地である今池遺跡、室町時代から現在の墓地である橋本遺跡など多数の遺跡が存在する。

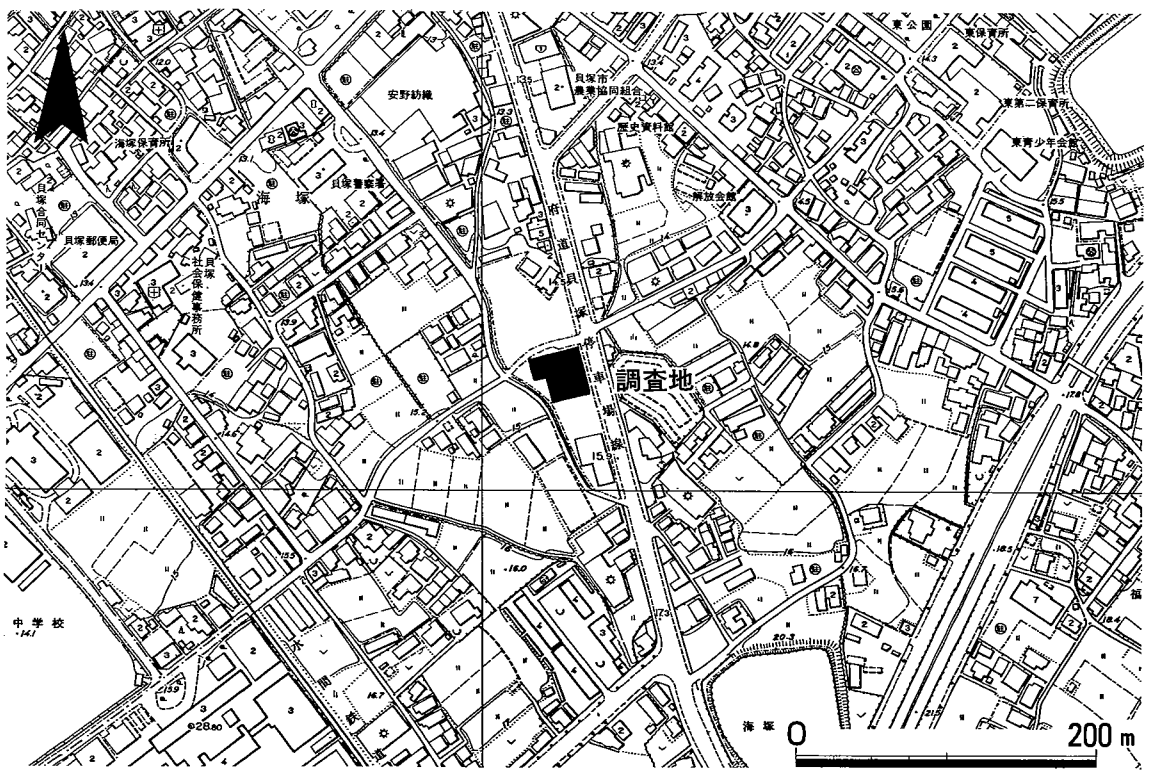


図2　調査地位置図

第3章　調査成果

1．調査の概要

今回の発掘調査は、開発計画に基づき建物建設予定地内に面積982㎡の調査区を設定して実施した。事前確認調査によって建設予定地内の南半分については遺物包含層が存在しないことを確認している。そのため今回は北半分について調査を行い、南側については調査を行わないため残土置き場として使用した。

調査区は国家座標に基づいた５×５の区画を設定し、東西方向にA～Hのアルファベット記号、南北方向に１～７までの数字を付けた。

今回の調査は、調査地が工場の跡地であるため攪乱の影響を大きく受けていることが予想された。部分的に攪乱の影響を受けているが、遺物包含層は調査区全体に良好に残っていた。調査区の南端部分は遺物包含層が堆積していたと思われるが、後世に削平を受けており、残っていない。調査敷地内の地形は段丘状になっており、各段上において遺構を確認している。

2．基本層序

調査区の現地表面はT.P15.2～15.8mを測る。調査区内の地形は段丘状に３段になっている。それぞれの段において包含層が堆積している。

基本層序は、第１層の現代盛土（層厚約0.9～1.8m）、盛土の下に、第２層の耕作土（層厚約0.2

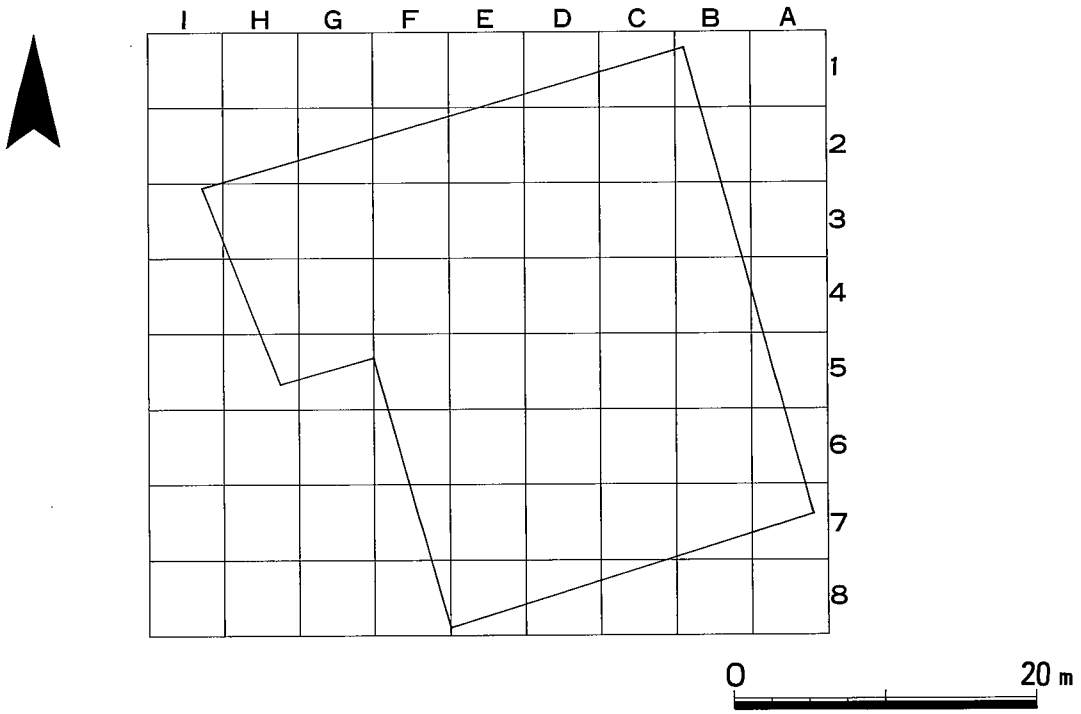


図３　調査区地区割図

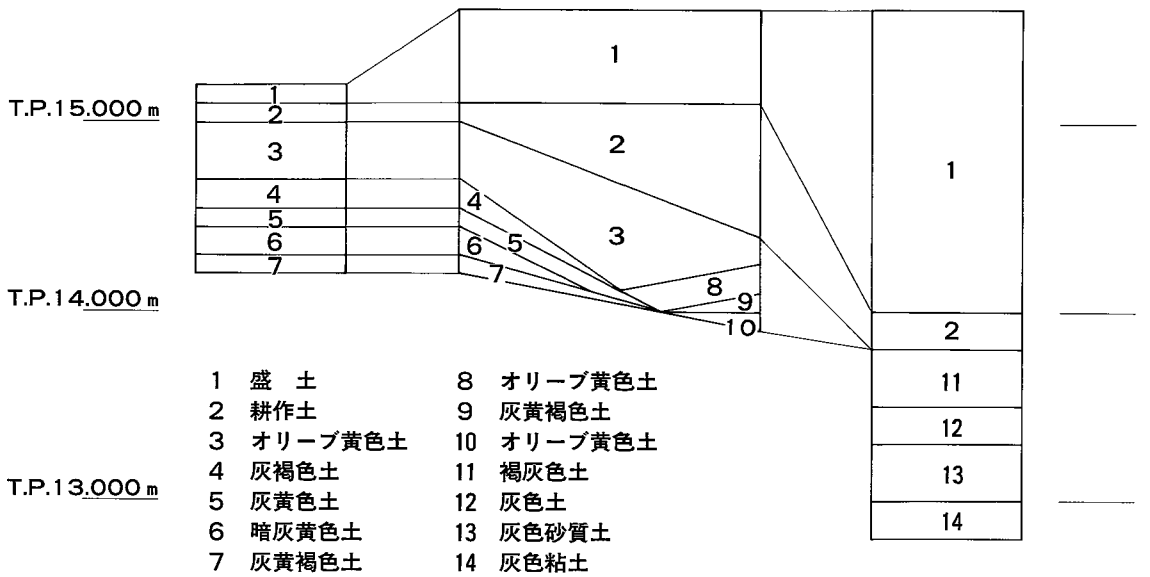


図4

～0.4m）が堆積している。1段目には第3層のオリーブ黄色土層（層厚約10cm）、第4層の灰褐色土層（層厚約15cm）、第5層の灰黄色土層（層厚約10cm）、第6層の暗灰黄色土層（層厚約15cm）、第7層の灰黄褐色土層（層厚約10cm）が堆積している。2段目には、第8層のオリーブ黄色土層（層厚約15cm）、第9層の灰黄褐色土層（層厚約15cm）、第10層のオリーブ黄色土層（層厚約10cm）、第11層の灰色土層（層厚約10cm）が堆積している。3段目には第12層の灰色土層（層厚約30cm）、第13層の灰色砂質土層（層厚約20cm）、第14層の灰色粘土層（層厚約10cm）が堆積している。第14層の下にSX－6001層（層厚約4.0cm～16cm）が堆積している。第3層と第8層は同一層と考えられる。地山は南から北に向かってT.P.14.9～12.97mで比高約2.0mを測る。

3．検出遺構

調査では、奈良時代の性格不明土坑一基、溝一条を検出し、中世の溝2条、近世の溝一条その他性格不明遺構、鋤溝群を検出している。

以下、主な遺構について概要を示す。

SX－6004

本遺構は、調査区の中央付近D,E－4,5区でSD－6003を切り込む形で検出した性格不明遺構である。攪乱で一部壊されているが、残りの規模は長軸1.3m、短軸1.1mを測る。深さ6.0cm～16.0cmを測る。地山面で検出した。埋土は2層で上層に灰黄色粗砂、下層に暗灰黄色土が堆積している。遺物は奈良時代の須恵器杯蓋が出土している。

SD－6003

本遺構はA～G－３～６区で検出した調査区の南東から北西に向かって走っている溝である。SX－6004に接しており、奈良時代につくられた溝であると考えられる。調査区外に拡がるため正確な規模は確認できないが、残存する遺構の規模は長さ33.5m、幅が0.3～2.6mを測る。深さは1.0～45cmを測る。埋土は５層堆積しており、上から灰褐色シルト、灰色粗砂、黒褐色粘土、灰褐色粘質土、灰色粗砂が堆積している。遺物はサヌカイト製の石鏃が出土している。

SD－6002

本遺構はB～F－４～７区で検出した遺構である。調査区の中央を南東から北西に向かって走っているSD－6003と隣接して検出した溝である。調査区外に拡がるため正確な規模は確認できないが、残存する遺構の規模は長さ25.8m、幅が0.4～2.4mを測る。深さは11.0～22.0cmを測る。埋土は２層堆積しており、上層に黄灰色シルト質土、下層に黄灰色粗砂が堆積している。中世の遺物が出土している。

SD－6001

本遺構は調査区の北東部に位置しG,H－２～５区で地山面上において検出した。調査区外に拡がるため正確な規模は確認できないが、残存する遺構の規模は長さ12.7m、幅が0.7～4.0mを測る。深さは48.0～64.0cmを測る。埋土は２層あり、上層に灰黄褐色土、下層に黒褐色粗砂が堆積している。底面のレベルは南から北へ向かって下がっている。遺物は瓦器椀、白磁碗が出土している。

SX－6005

本遺構はE～G－２,３区で地山黄色シルト上面で検出した遺構である。調査区外に拡がるため正確な規模は確認できないが、残存する規模は長軸10.5m、短軸3.5mを測る。深さは2.0～16.0cmを測る。

SX－6001

本遺構は、A～D－１～５区で第14層を除去した面で検出した遺構である。調査区外に拡がるため、正確な規模は確認できないが、残存する規模は長軸24.3m、短軸8.5mを測る。深さは4.0～16.0cmを測る。遺物は瓦器椀底部が出土している。

SK－2103

本遺構は、B,C－4,5区でSX－2103の下面で検出した遺構である。長軸1.5m、短軸1.5mを測る。深さは26.0～72.0cmを測る。埋土は灰色砂質土である。遺物は土師質羽釜大和型が出土している。

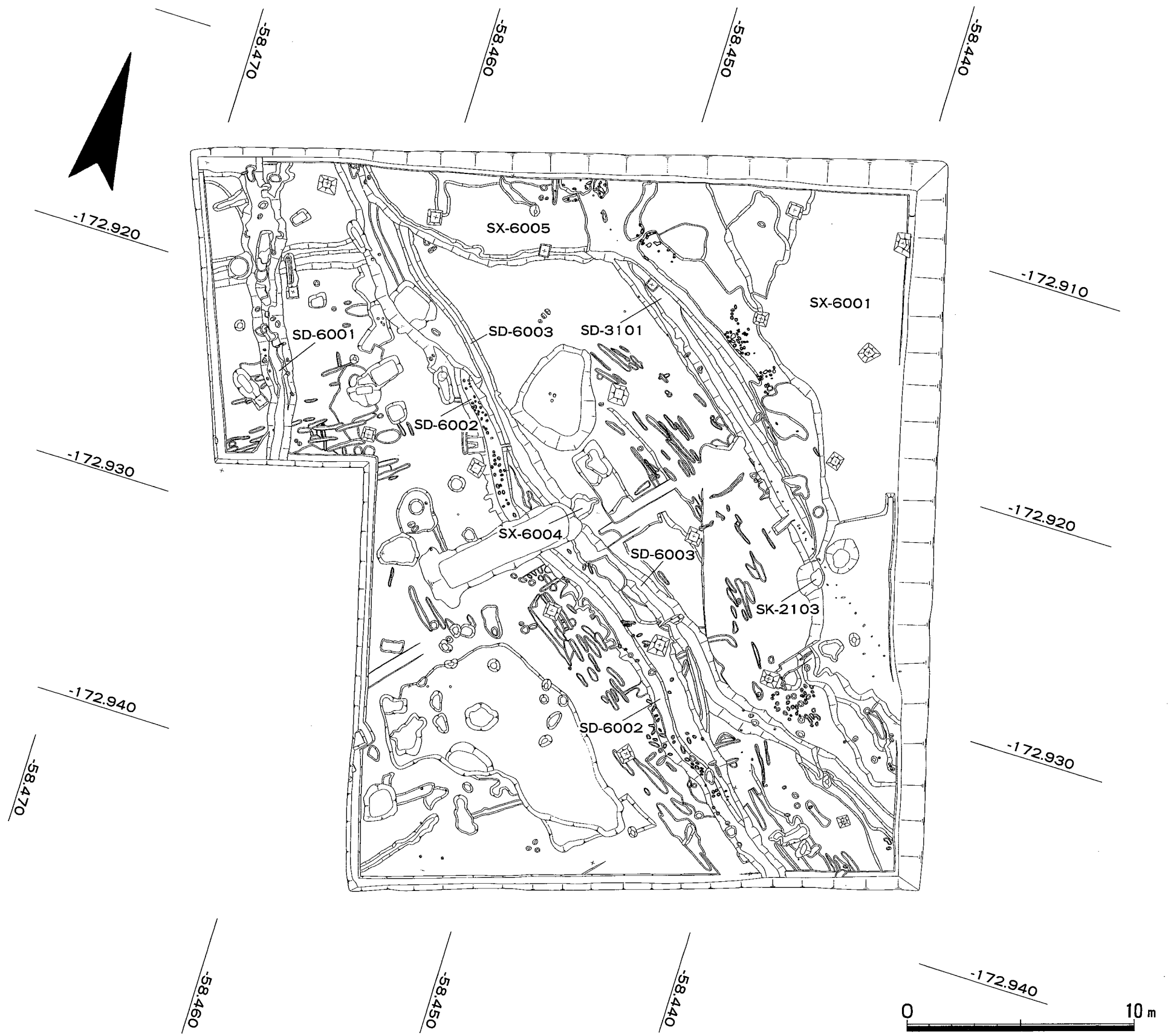

-58.470
-58.460
-58.450
-58.440
-172.920
-172.910
-172.930
-172.920
-172.940
-172.930
-172.940
SX-6005
SX-6001
SD-6001
SD-6003
SD-3101
SD-6002
SX-6004
SD-6003
SK-2103
SD-6002
0
10 m

図5　最終面遺構配置図

SX－2103

本遺構は、A～C－４～７区で検出した遺構である。第８層を除去した面で検出した。SX－2101、SX－2102に切り込まれた状態で検出した。調査区外に拡がるため正確な規模はわからないが、残存する規模は長軸14.9ｍ、短軸6.7ｍを測る。深さは10.0～88.0㎝を測る。遺物は土師質羽釜口縁部が出土している。

SX－2102

本遺構は、A～C－４～７区で検出した遺構である。第８層を掘り下げた面で検出した。隅丸長方形で長軸10.9ｍ、短軸5.4ｍを測る。深さは6.0～30.0㎝を測る。埋土はオリーブ黄色土である。

SD－3101

本遺構はB～E－２～５区で検出した。３段目の旧耕作土を除去した面で検出した近世の溝である。調査区の南東から北西に向かって走っている溝である。埋土は旧耕作土である。全体の規模は調査区外に拡がっているためわからないが、長さ25.0ｍ、幅は0.5～1.0ｍを測る。深さは5.0㎝～18.0㎝を測る。遺物は土師質焙烙口縁部が出土している。

４．出土遺物

調査では土師器、瓦器等の中世土器が大半を占め、他にサヌカイト、陶磁器が出土している。瓦、須恵器が少量出土している。

SX－6004

11は奈良時代の須恵器杯蓋である。残存口縁径は15.4㎝、高さ2.7㎝を測る。つまみの径は3.2㎝を測る。外面は回転ナデがみられ、つまみの部分にはナデが施されている。

SD－6001

１は瓦器椀である。復元口径は14.2㎝、残存高3.3㎝を測る。外面にはナデ後指押さえがみられ、内面にはナデ後ミガキが施されている。

２は瓦器皿である。復元口径は12.4㎝、残存口径は3.1㎝を測る。外面には沈線がみられ、口縁部に指押さえを施す。外面下部にはナデ後指押さえを施し、重ね焼痕がみられる。内面にはナデ後ミガキがみられる。

３は瓦器椀である。復元高台径は4.6㎝、残存高は1.3㎝を測る。高台は貼り付けてある。外面にナデ内面にナデ後ミガキを施している。

４は白磁碗である。復元高台径は7.4㎝、残存高は2.7㎝を測る。高台部に回転カンナ削りが施されている。

SX－6005

7は瓦器皿である。復元口径は11.0cm、残存高は1.5cmである。外面に指押さえ後ナデがみられる。内面にはナデがみられ、重ね焼痕がみられる。口縁部には横ナデが施されている。

8は土師器皿である。復元口径は9.4cm、残存口径は1.1cmである。外面、内面共にナデがみられ、口縁部には横ナデが施されている。

9は土師質羽釜である。復元幅が32.8cm、残存高が6.0cmを測る。外面に鍔とそれより上部に

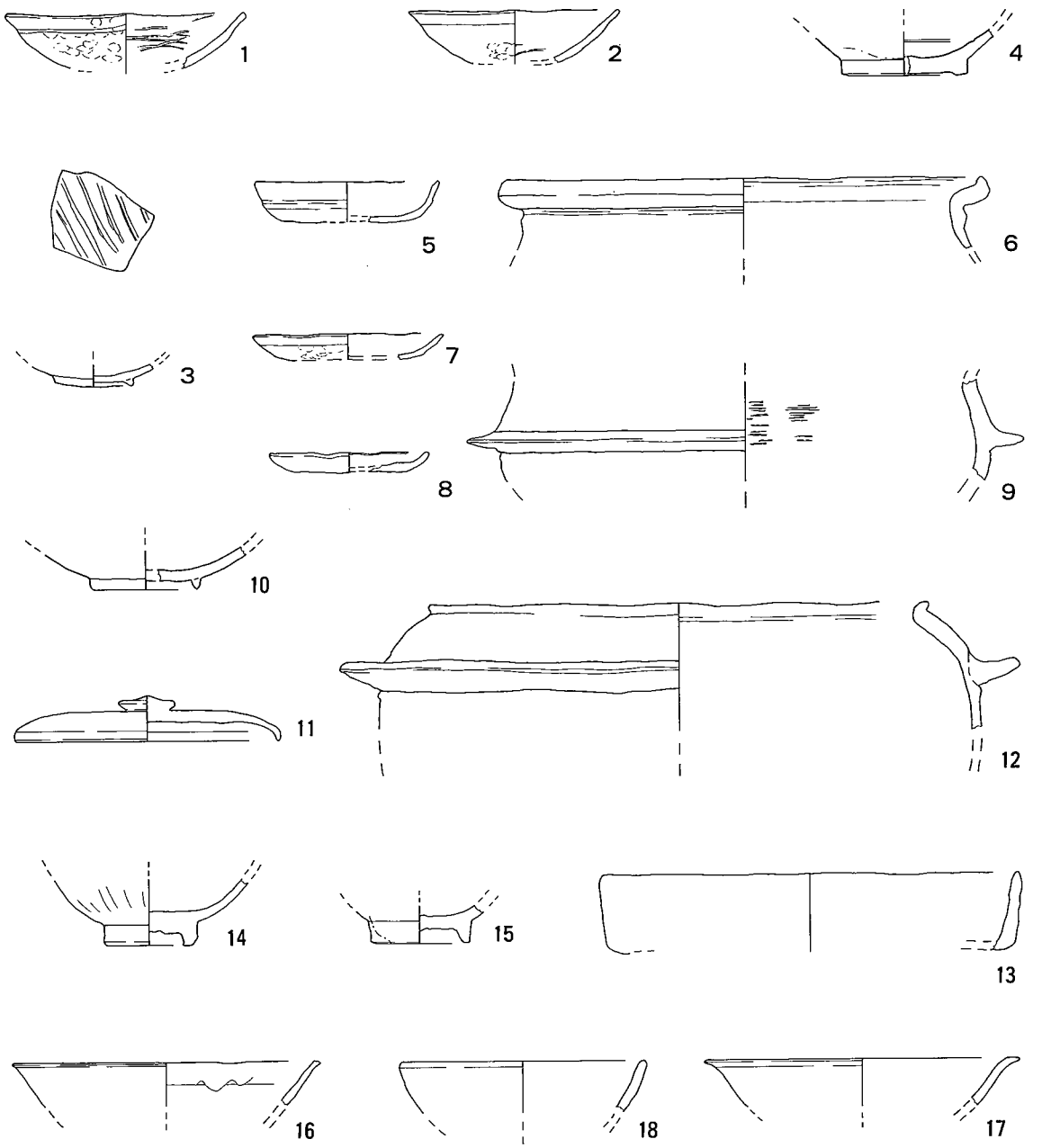


図6　出土遺物

は横ナデがみられ、下部にはケズリが施されている。内面には刷毛目がみられる。

SX－6001

10は瓦器椀底部である。復元高台径は6.0㎝、残存高は2.5㎝を測る。外面、内面共にナデを施している。高台部は貼り付けている。

SK－2103

12は土師質羽釜である。復元口径は22.9㎝、残存高は7.5㎝、鍔径は40.0㎝を測る。外面は鍔上部に横ナデ、鍔下部にナデを施しススが付着している。内面にナデを施している。鍔は接合した後押さえながらナデを施している。

SX－2103

5は土師器杯口縁部である。復元口径は10.8㎝、残存高は2.4㎝を測る。外面は口縁部に横ナデ、底部にナデを施している。内面にナデを施している。

6は土師質羽釜口縁部である。復元口径は28.0㎝、残存高は4.3㎝を測る。外面は口縁部に横ナデ、頸部にケズリを施している。内面は剥離しているため調整不明。

SD－3101

13は土師質焙烙口縁部である。復元口径は24.6㎝、残存高は4.6㎝を測る。外面内面共に横ナデを施している。

第32層

14は青磁碗である。復元高台径は4.8㎝、残存高は3.9㎝を測る。外面、内面共に釉施されている。高台部には回転カンナ削りが施されている。

第23層・第24層

16は白磁口縁部である。復元口径は17.8㎝、残存高は2.6㎝を測る。外面、内面共に釉が施され、内面に沈線がみられる。

第11層

15は白磁底部である。復元高台径は5.6㎝、残存高は2.2㎝を測る。外面に回転カンナ削り、内面に釉が施されている。

第10層

17は白磁口縁部である。復元口縁径は18.2㎝、残存高2.8㎝を測る。外面、内面共に釉が施さ

れている。

田耕作土

18は青磁碗口縁部である。復元口縁径は14.4㎝、残存高は3.0㎝を測る。外面、内面共に厚く釉が施されている。

青花

19〜21は青花である。19は景徳鎮窯系碗底部片高台外面にはケズリ痕を有す。見込みは花文を施す。20は漳州窯系碗口縁部片である。陶胎であり、外面には草文を施す。21は漳州窯系盤底部片である。半磁胎である。

19はSD - 3101、20は第３層、21は耕作土直下出土である。

現代磁器

22、23は現代盛土から出土した昭和のものである。共に磁器碗であり、高台内には22では「東陽軒眞山製」「□に瀬629」、23は「東陽軒平八製」とある。

石製品

24はサヌカイト製石鏃である。長さ２㎝を測る。SD－2302出土。25〜28はサヌカイト製石核である。長さは25が10㎝、26が７㎝、27が６㎝、28が6.5㎝を測る。風化が進んでおり、灰白色を呈す。25がSX－6001、26がSD－6002、27が第９層、28が側溝出土である。すべて縄文時代のものと思われる。

29は砥石である。長さ7.5㎝を測る。SD－2101出土。

第4章　まとめ

今回の調査では奈良時代、中世、近世の3時代について遺構を検出した。それ以外については遺物等出土するものの明確ではない。以下判明した事実から調査地の変遷について述べる。

調査区最終面における主な遺構として溝3条、鋤溝、性格不明遺構等を検出している。

奈良時代以前の明確な遺構は確認できなかったが、SD－6003から縄文、弥生時代のサヌカイトの石鏃が出土している。これらの遺物は摩滅が少なく流されてきたとは考えにくい。縄文時代の遺物はサヌカイトのみで他には全く出土していない。遺物包含層は確認していないが、後世に何らかの削平を受け、破壊された可能性がある。調査地において集落が存在するかは不明だが、周辺においてその存在が考えられる。

奈良時代の遺構は段の肩に対して平行に走っているSD－6003とSX－6004を確認している。SD－6003は段の肩に対して平行に走っており、自然に流れている様子が無く人工的につくられた溝であろうと考えられる。SX－6004は上層において須恵器の蓋が出土しているが、他には全く遺物が出土していない。どの様な状態にあったのか、どの様な目的で使用されていたのか現状では不明であるが、SX－6004が農耕に関連する遺構とは検出状況から考えにくい。SD－6003は調査区外に拡がっているためその規模が明確ではないが、集落に伴う区画溝の存在を推定することができる。奈良時代の遺構として明確なものはこれだけで包含層からの出土遺物も量的に少ないが、当年代の集落が存在した可能性は高い。奈良時代の遺物を含むが、中世に破壊を受けた時点で中世の層に混入したものと考えられ、調査区の南端は奈良時代の包含層は存在していたが、後世に削平を受けていると考えられる。

中世の遺構は調査区外に拡がるSD－6002、SD－6001を確認している。遺跡の近辺には中世の集落跡が確認されているため何らかの関連が推定される。

SD－6002はSD－6003同様に段の肩に対して平行に走っており自然流路とは考えにくく、人工的に作られていると考えられる。SD－6001の底部に杭の跡である小さな穴が確認されている。杭穴は溝の両脇に約1ｍの間隔をおいて存在し、一定の間隔で並立している。この杭穴から人為的に抜き取ったのか木片は全く出土していないが、おそらく木の杭が打ち込まれていたと考えられる。これは何らかの構築物があったのではないかと推察される。どのような目的で杭が打ち込まれたのか。推測の域を出ないが、杭を打ちその上に橋を架けていたと考えられる。調査区の南西側を舗装された道路が東から西に向かって通っている。この道路が水間街道であることは知られているがSD－6001の存在からこの街道の位置が変わっている可能性がある。

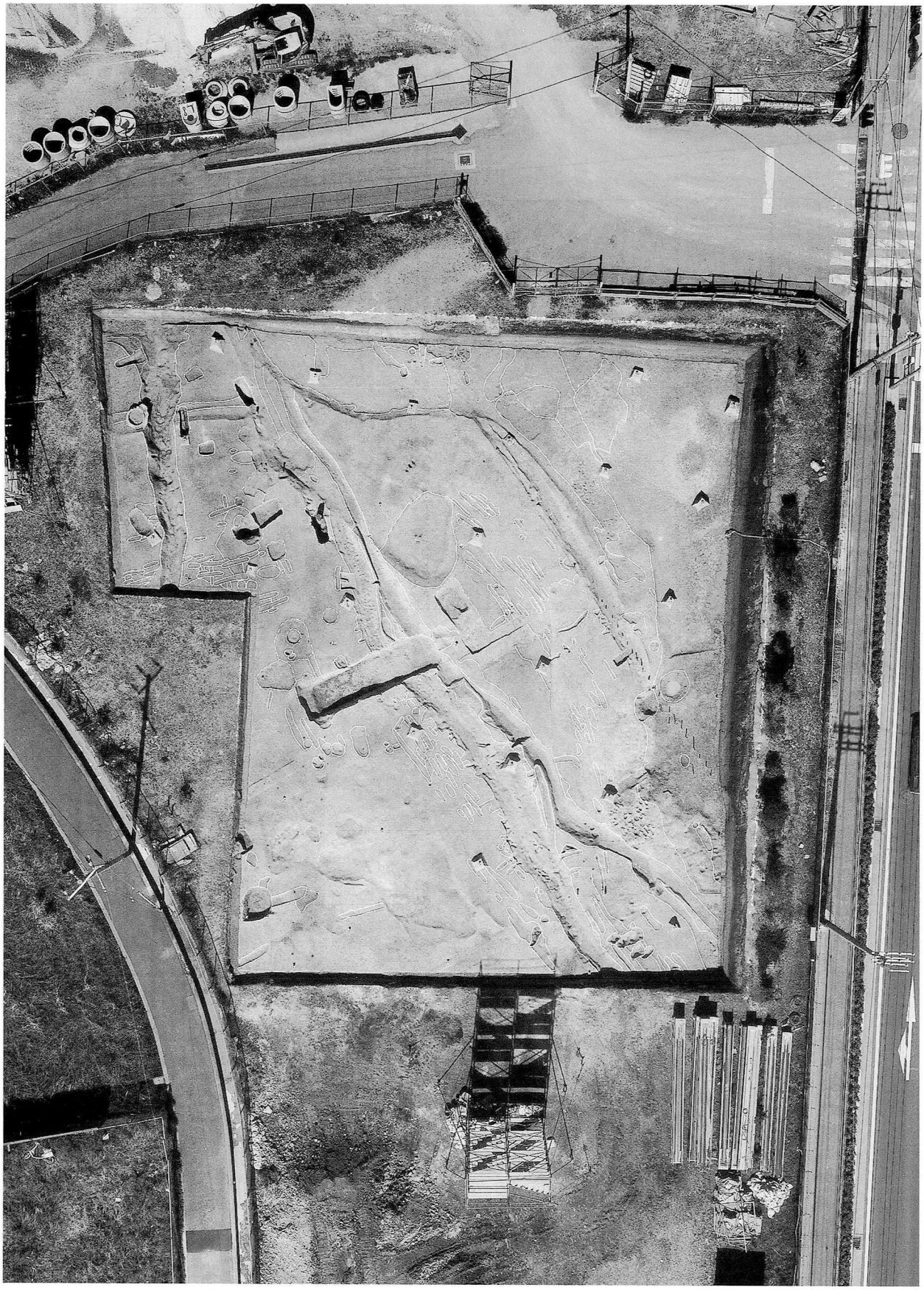
近世の遺構はSD－3101、水溜施設を確認している。SD－3101内に杭列がみられ、土層の堆積状況から田圃に伴う区画溝が排水溝として使用していたとみられる。調査区近辺は既設の工場の略社史によると耕作地であったことが分かっており、史料の耕作地の位置と方向が一致する。このことから大正時代までは耕作地であったことが窺える。その後工場の建設に伴う造成がおこな

われている。その造成盛土内からではあるが、戦時中の陶磁器が多数出土している。

調査地の地形は段丘上に３段になっており、それぞれの段において包含層が堆積している。包含層の年代は13世紀から16世紀と考えられる。ほとんどの包含層上面において鋤溝を確認しており、段の肩に対して平行に走っているものと直交するものとがある。長期にわたりこの地で耕作を営んでいた様子が窺える。奈良時代以前の包含層は残存していないが、出土した遺物から当時の遺物包含層、遺構が存在していたことは確実である。調査地より南側には削平を受けているため包含層は存在しないが、北西側に集落が存在する可能性がある。周辺における奈良時代の遺構検出例が少なく当時の様子を窺える成果はあまり得られていない。今回の調査成果においても得られた資料は少ないが、奈良時代の当地における生活の一端を明らかにできたことは貴重である。これからの周辺調査による成果を待ちたい。中世には斜面になっていた地形を耕作地用に階段状に作り替えられている。この時期に奈良時代以前の遺構、遺物包含層は削平されたと推定する。近世に入っても変わらず耕作地として使用し、昭和に入るまで続いたと考えられる。時代の明確なものとしての遺構は少ないが、これからの周辺の調査につながる結果を残すことが出来た。遺物は量的には多いとは言えないが、この地で生活していた人々の痕跡を知るに良好な史料を得ることができた。今回の調査で検出した遺構は耕作に関連すると思われるものが大半であった。橋を設置していたとみられる遺構は検出したが、建物の遺構と思われるものは検出できなかった。今後の周辺調査によって新たな資料が加わることを期待したい。

図　　版

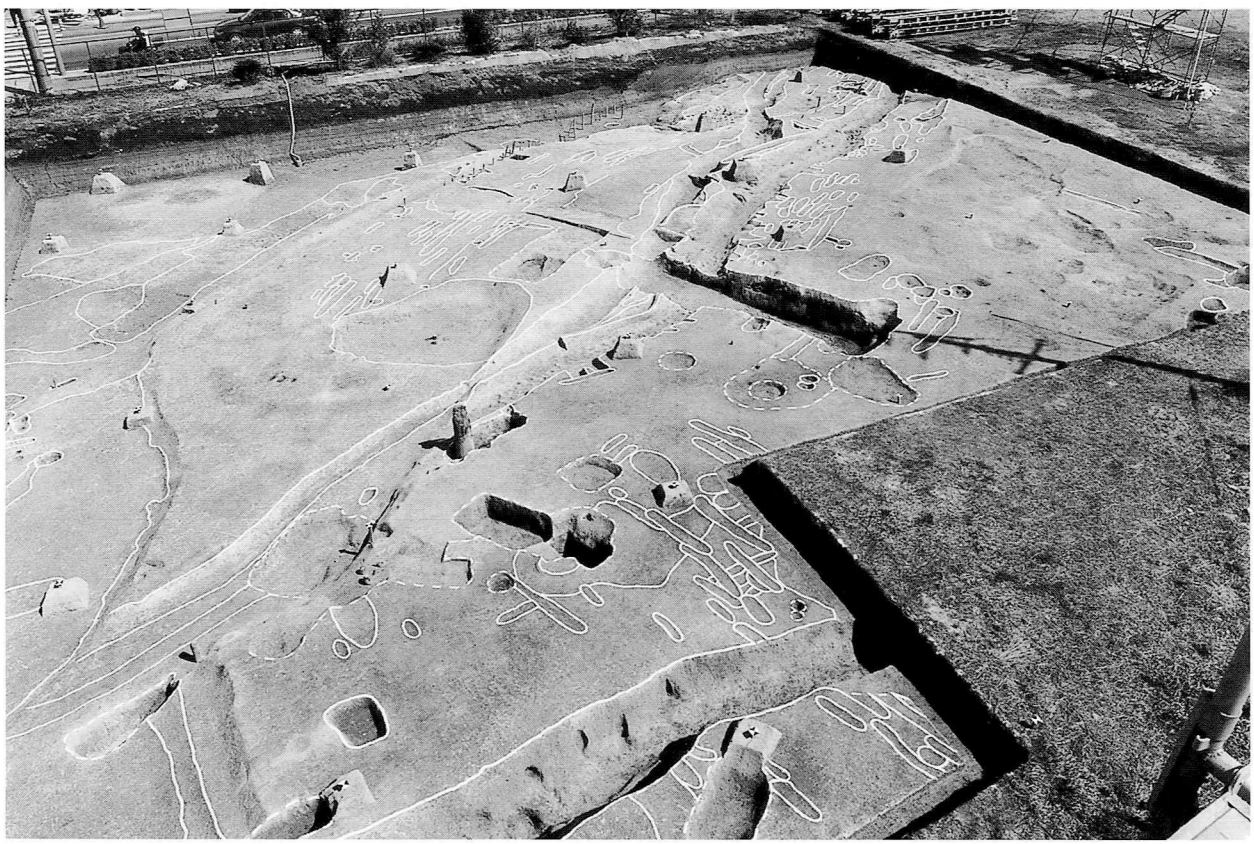
図版1　検出遺構



航空写真

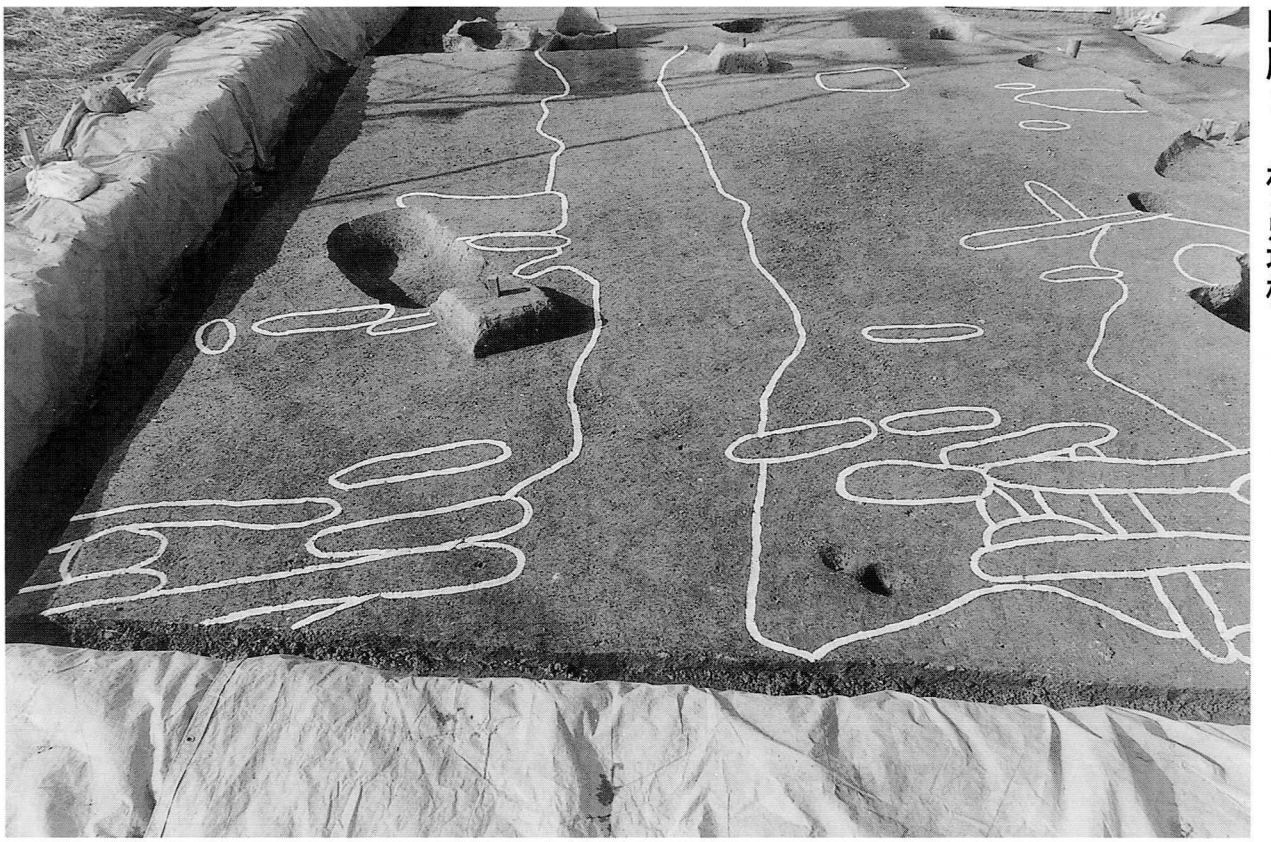
図版2　検出遺構

1．全　　景　　南より



2．全　　景　　西より

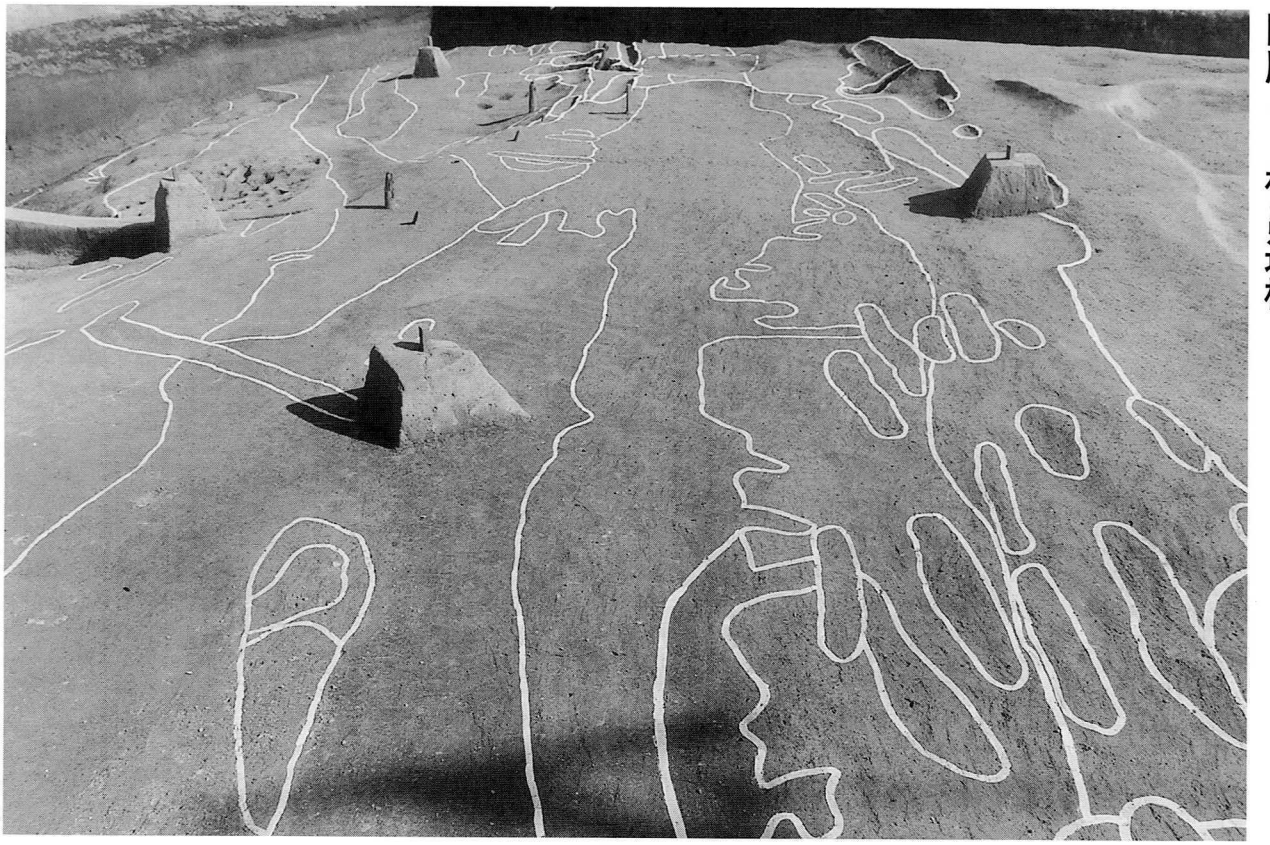
図版3　検出遺構



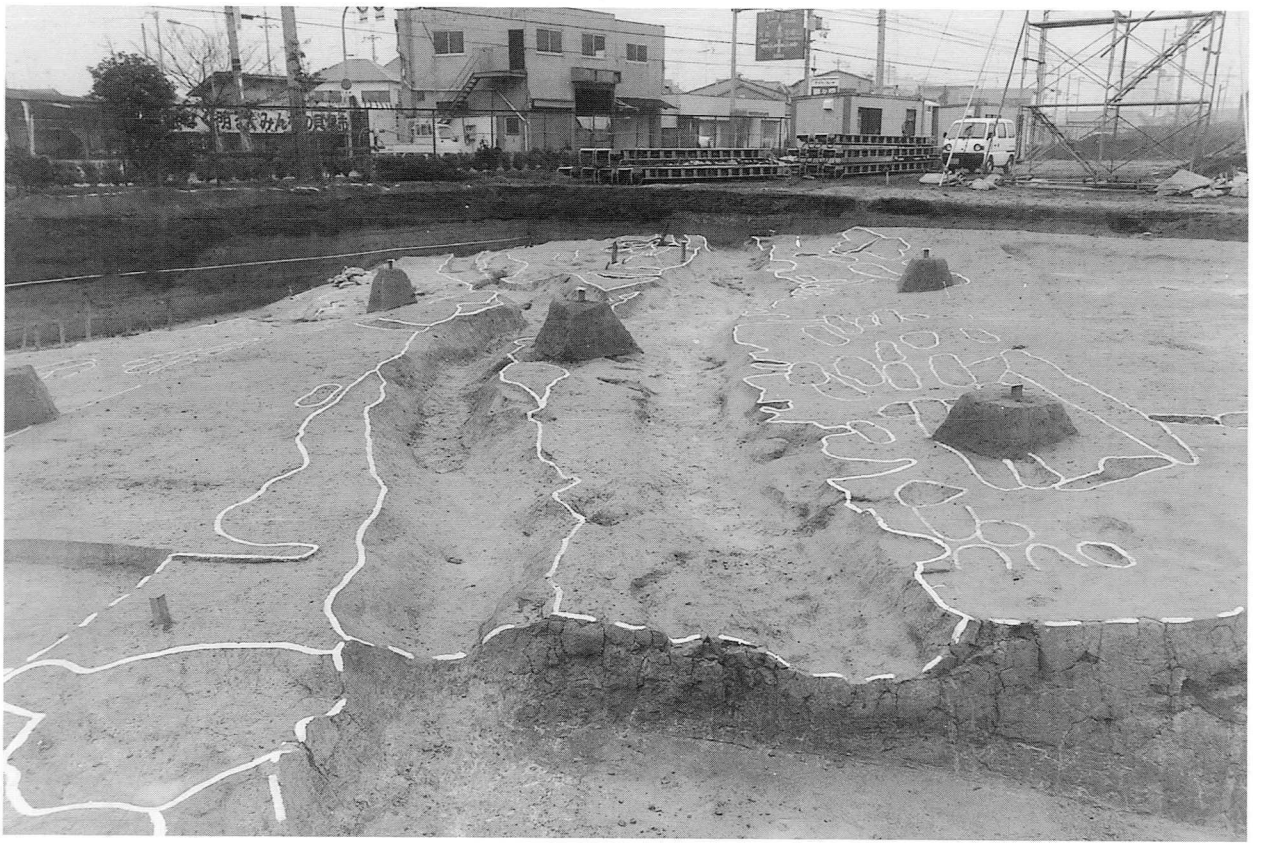
1．SD-6001　　南より

2．同　　上　　南より

図版4　検出遺構

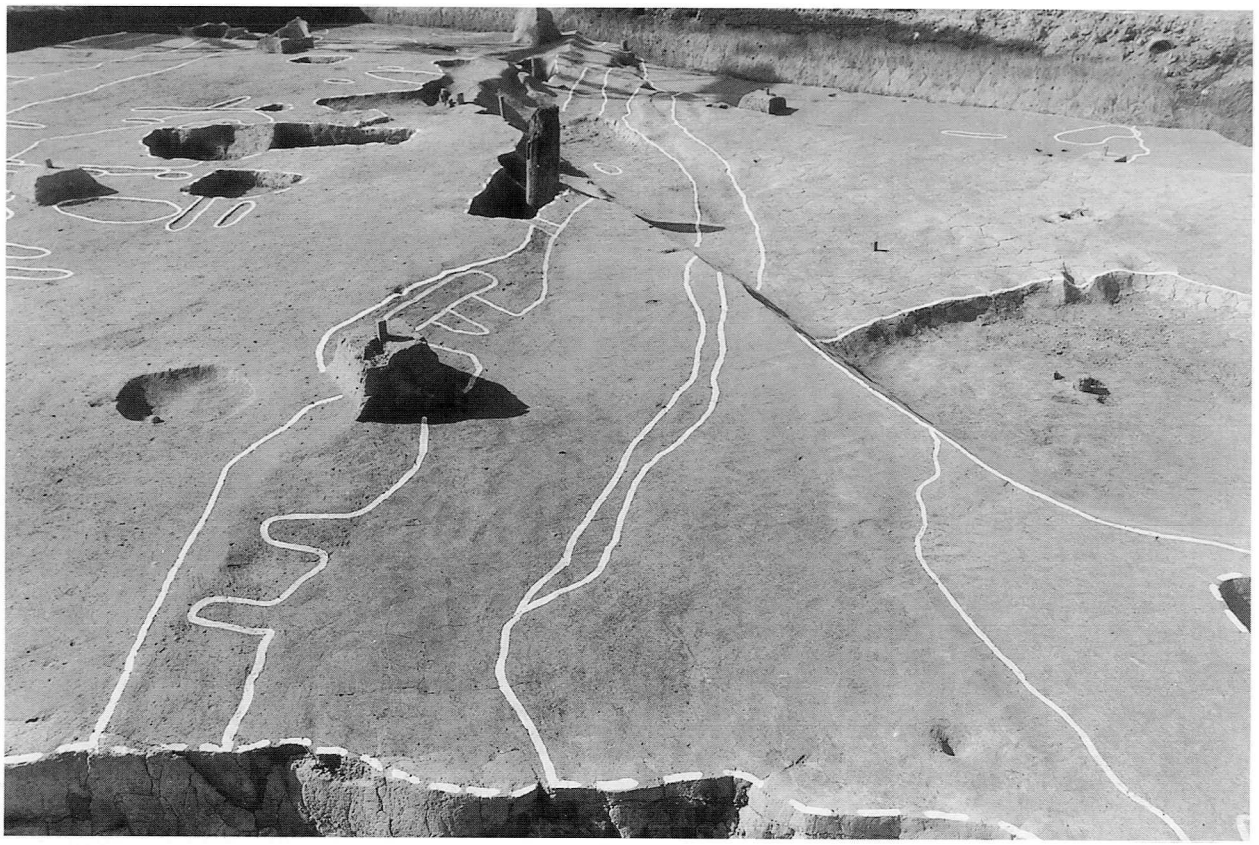


1．SD-6002，SD-6003　　北西より

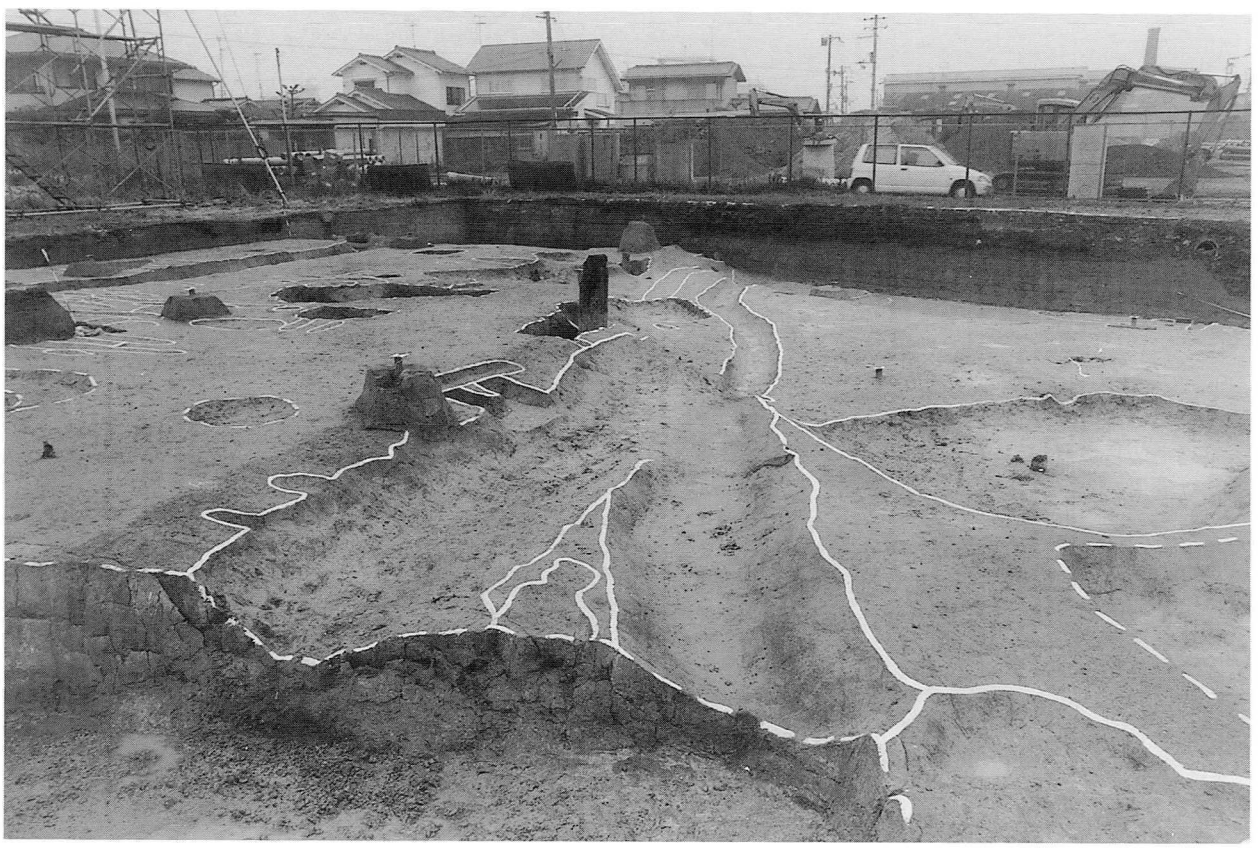


2．同　　上　　北西より

図版5　検出遺構

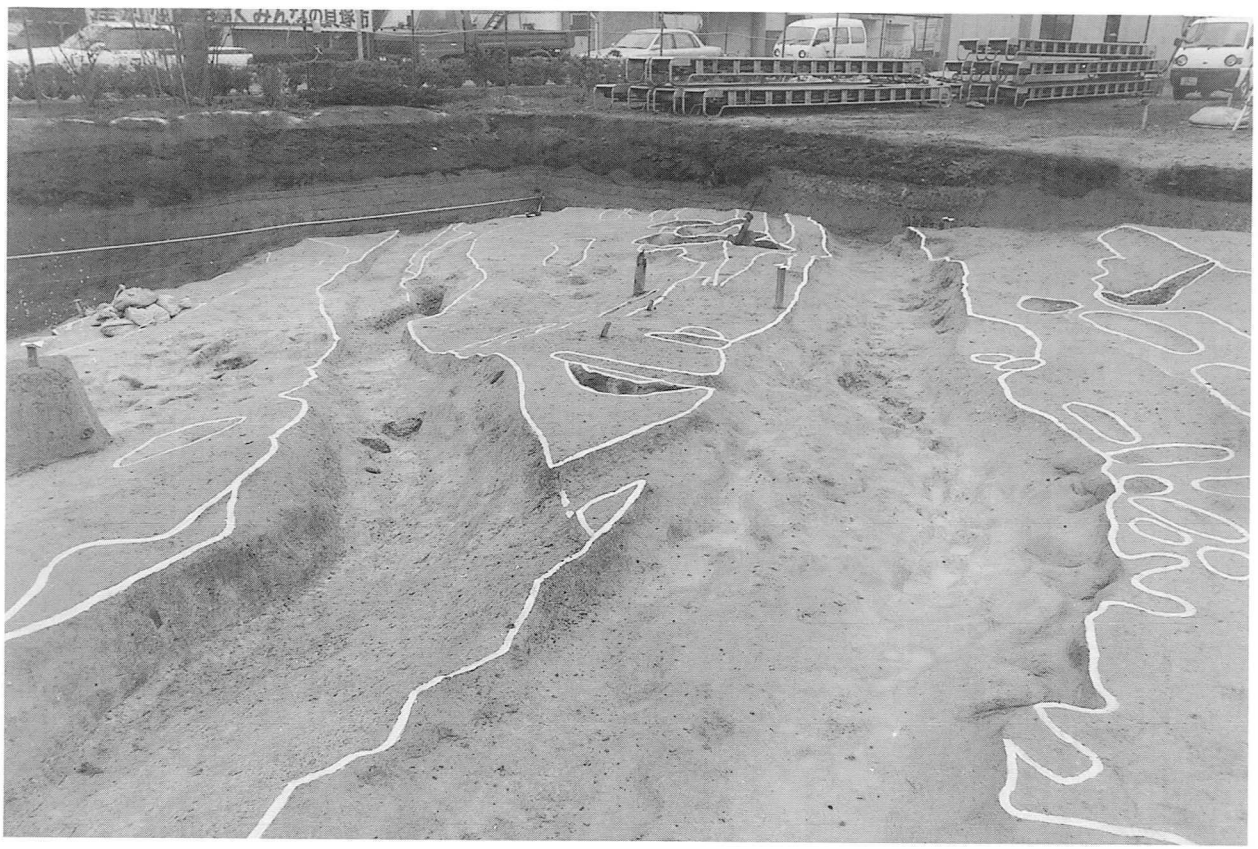


1．SD-6002，SD-6003　　北西より



2．同　　上　　北西より

図版6　検出遺構

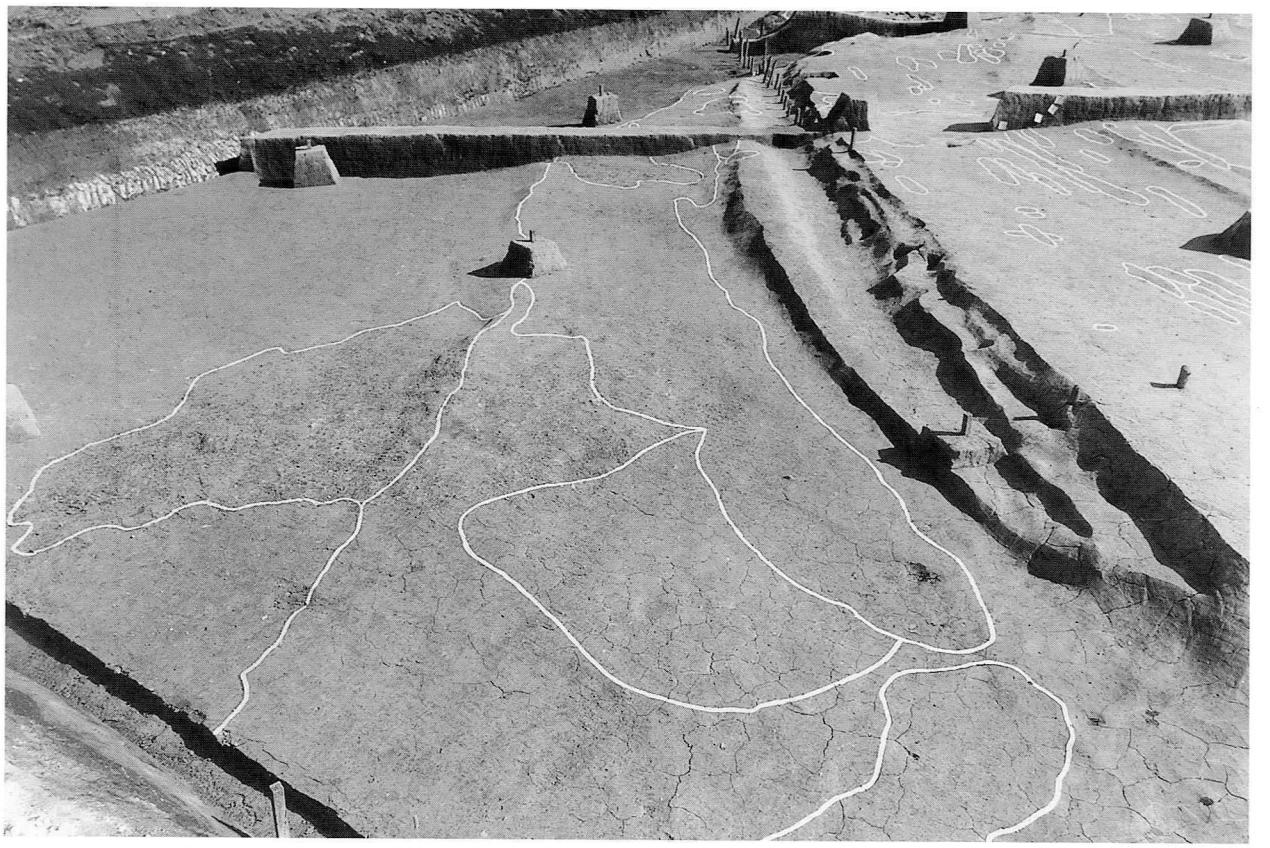


1．SD-6002，SD-6003　　北西より

2．同　　上　　南東より

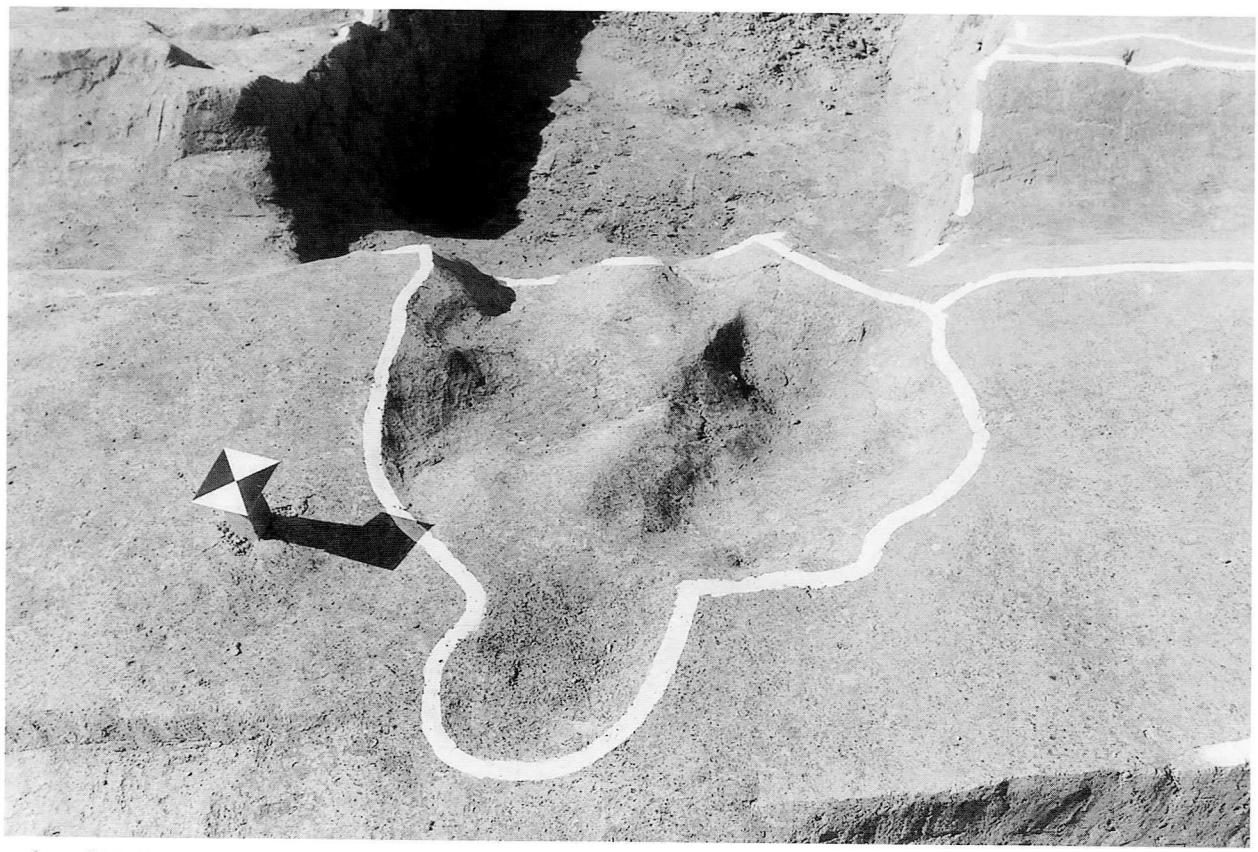
図版7　検出遺構

1．SX-6001　　南東より

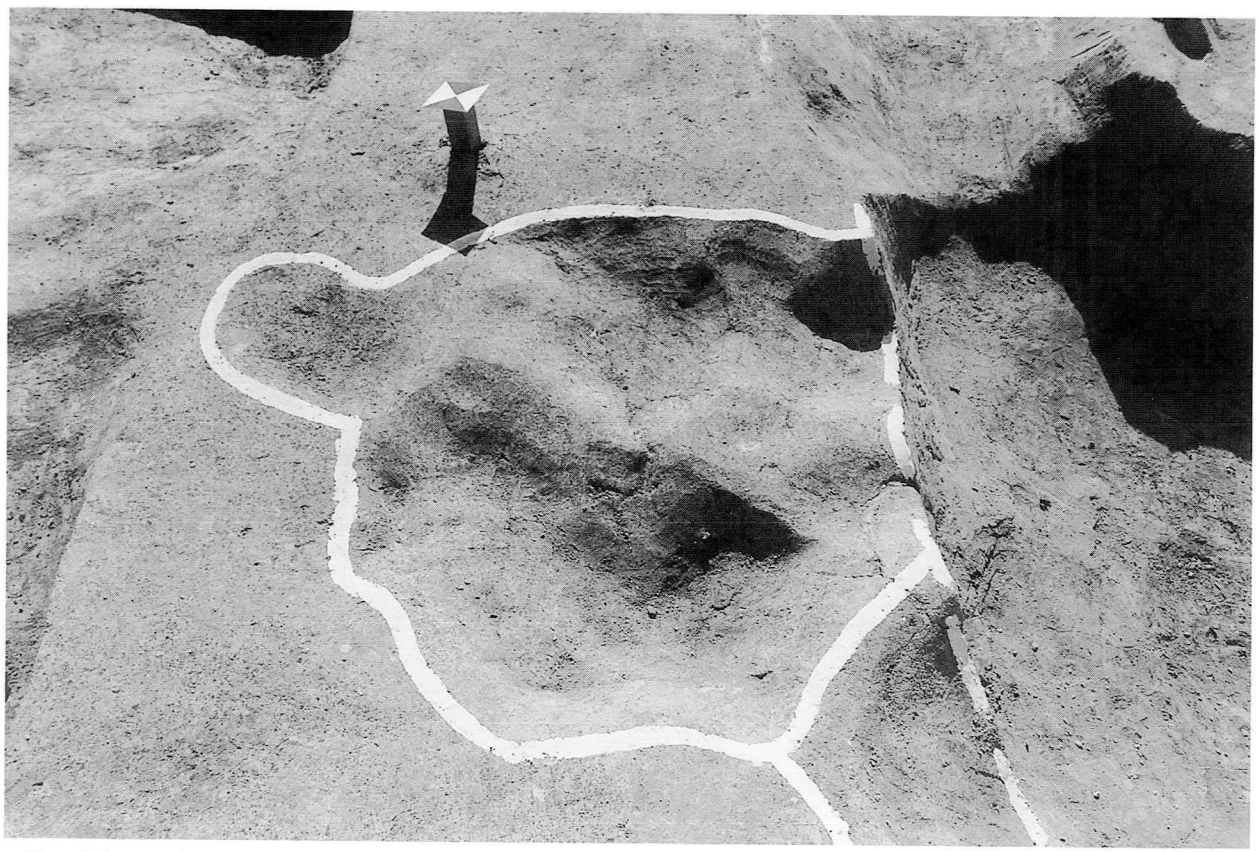


2．同　　上　　北西より

図版8　検出遺構



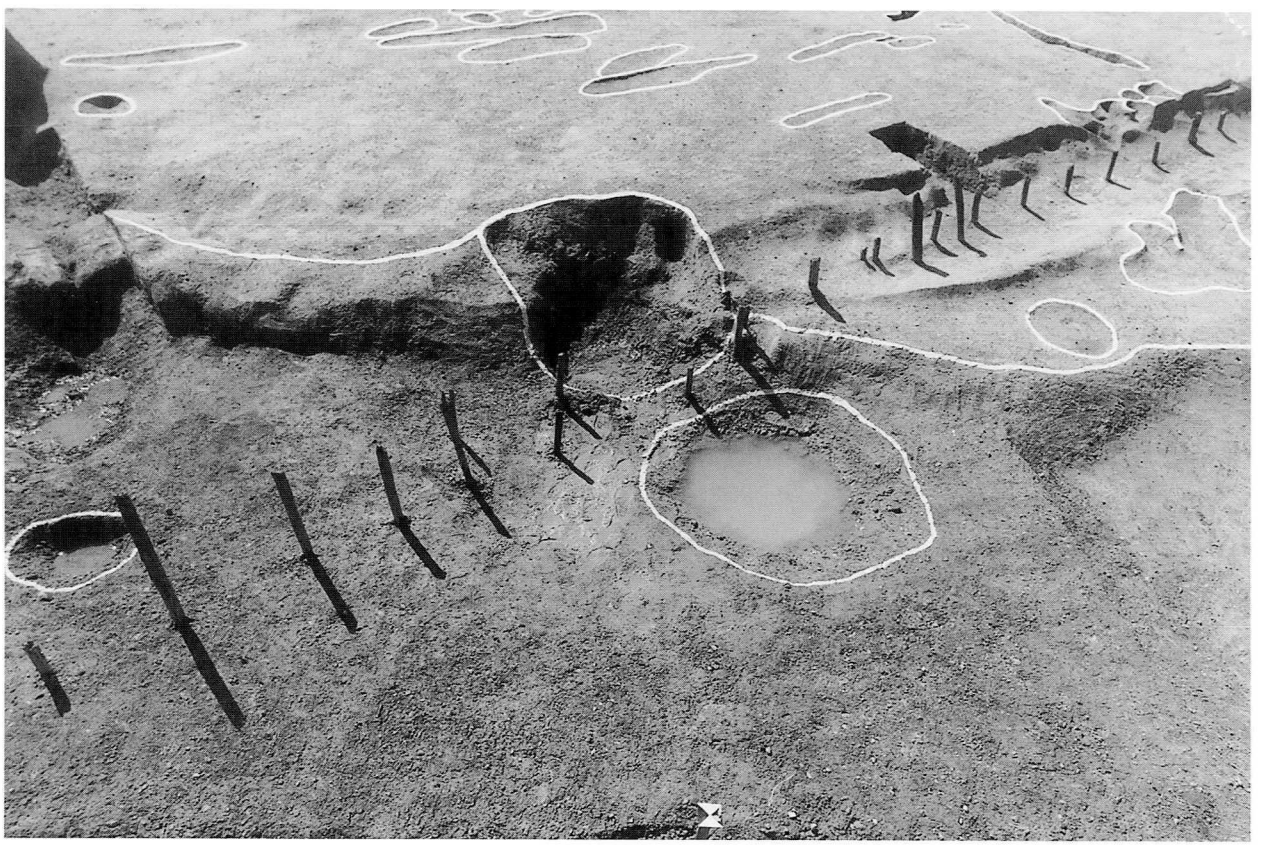
1．SX-6004　　北東より



2．同　　上　　北より

図版９　検出遺構

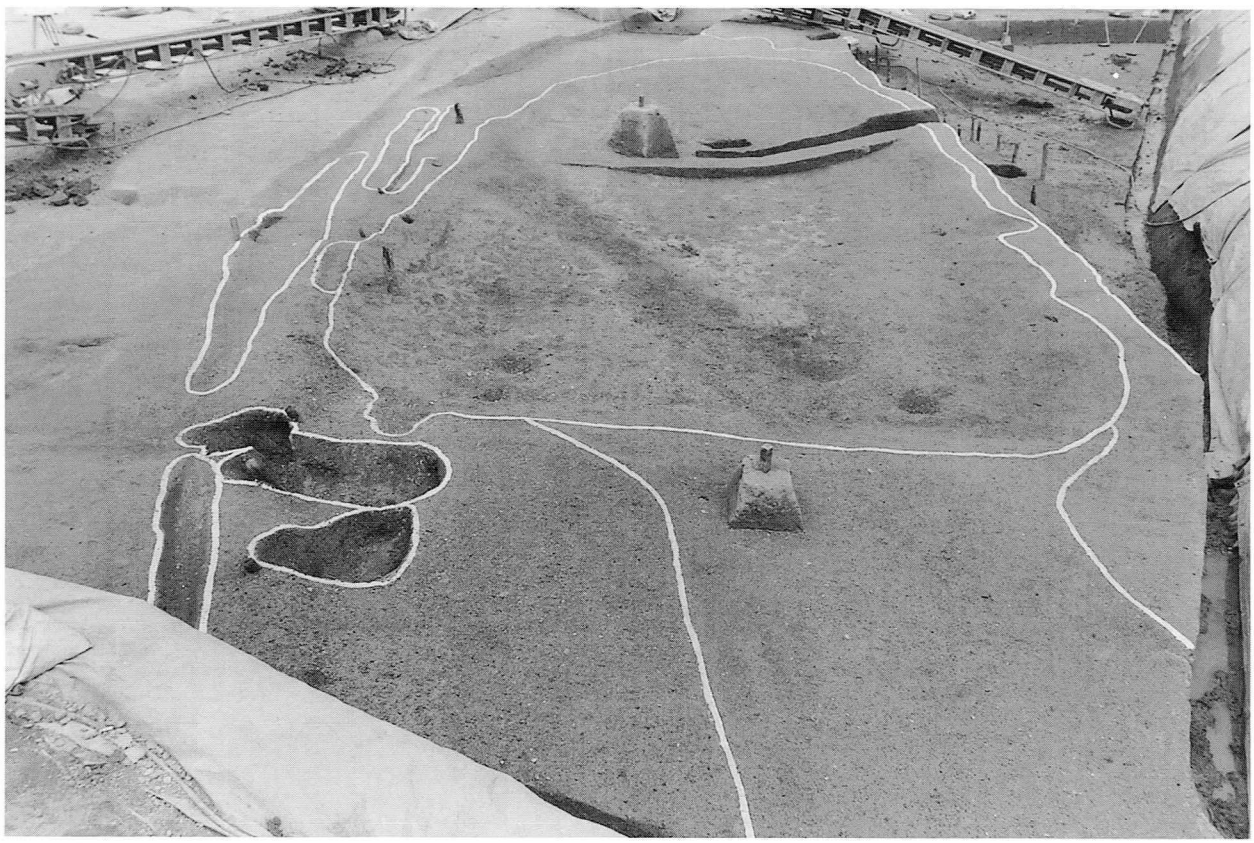
１．SX-6005　　西より



２．SK-2103　　東より

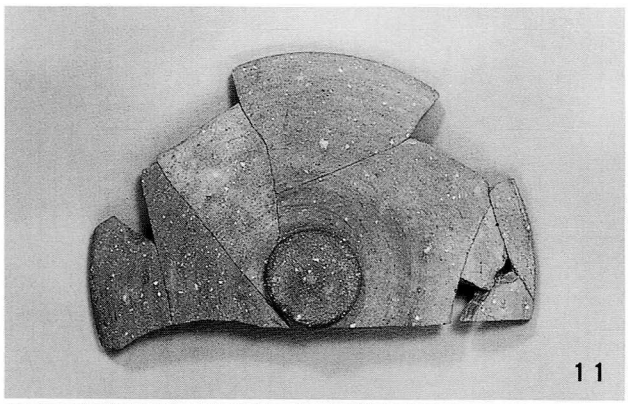
図版10　検出遺構

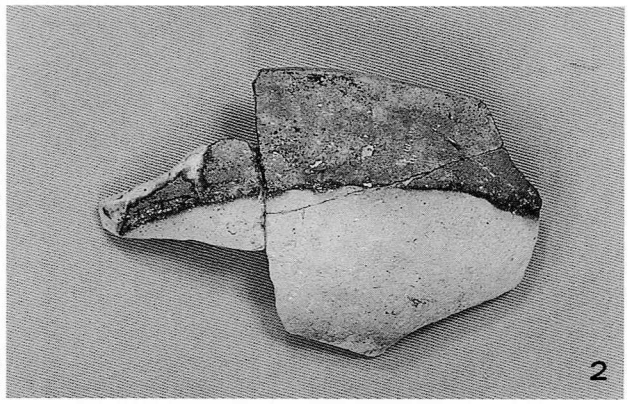
1．SX-2102　　南東より

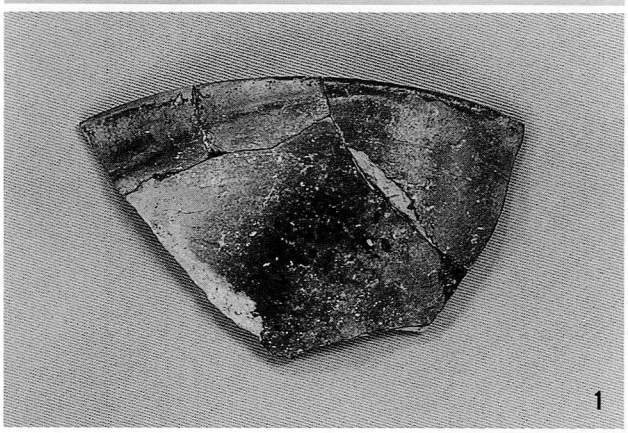


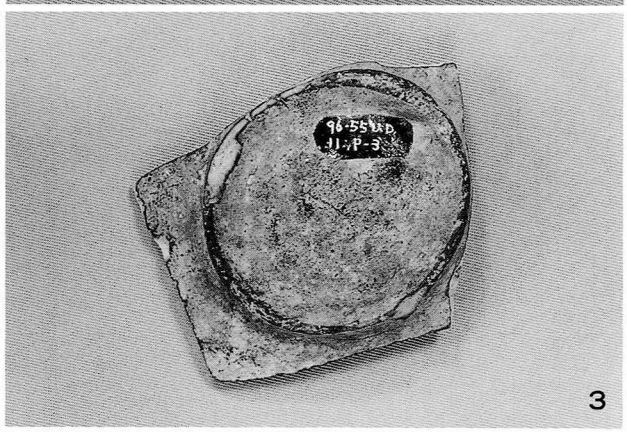
2．同　　上　　南東より

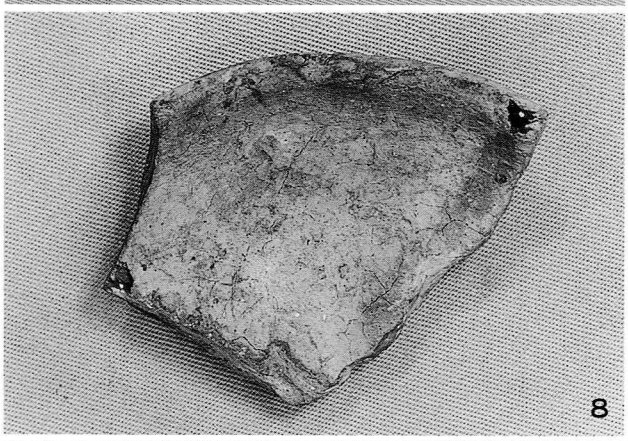
図版11　出土遺物

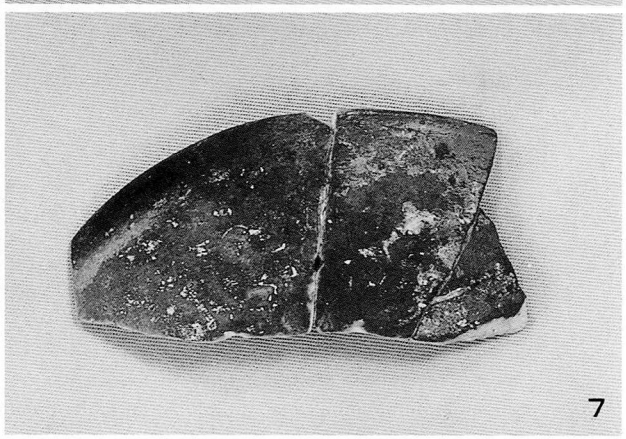


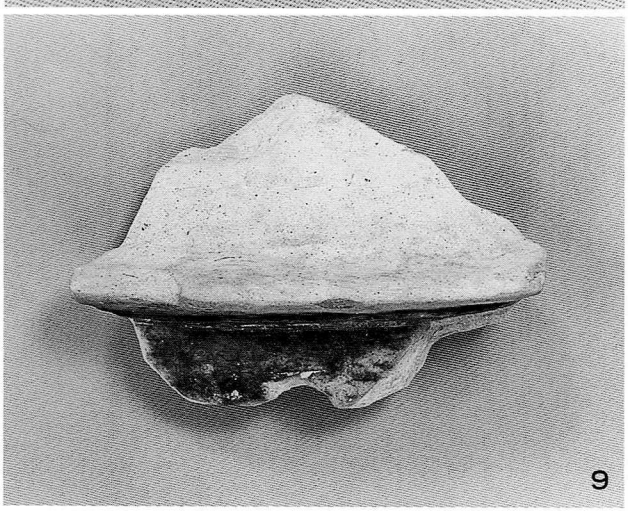






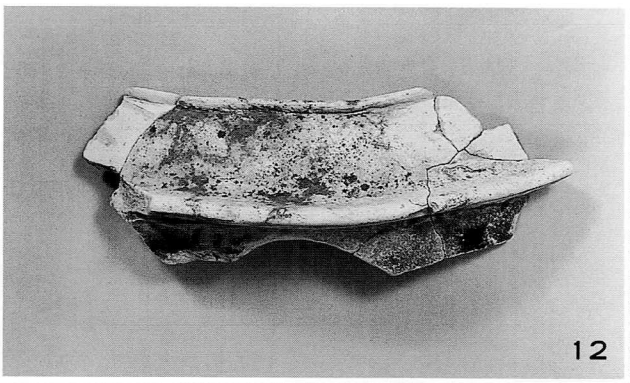


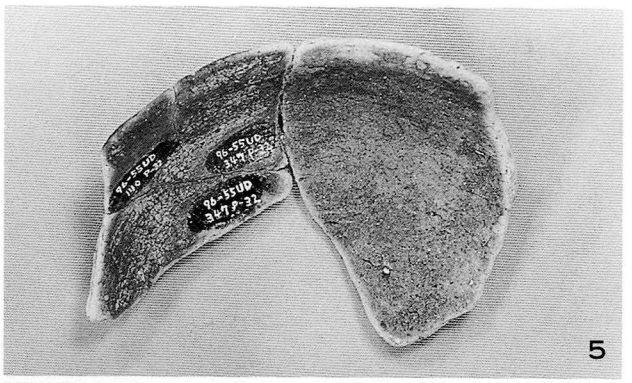


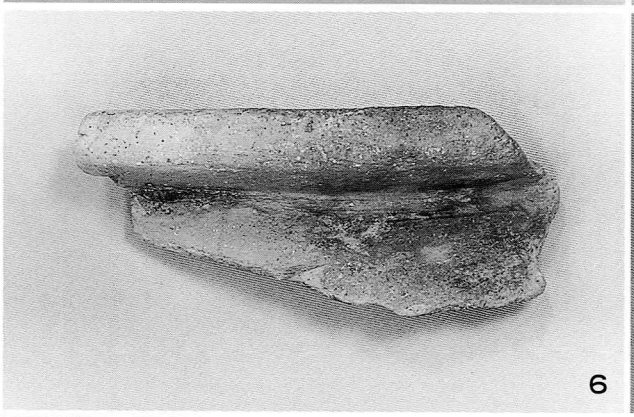


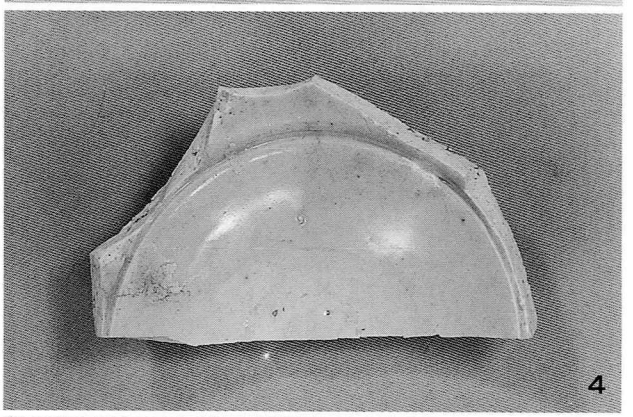
SX-6004(11)、SD-6001(1、2、3)、SX-6005(7、8、9)、SX-6001(10)

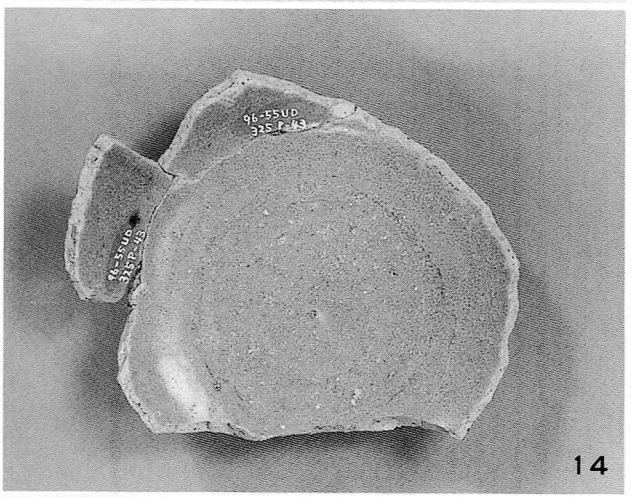
図版12　出土遺物

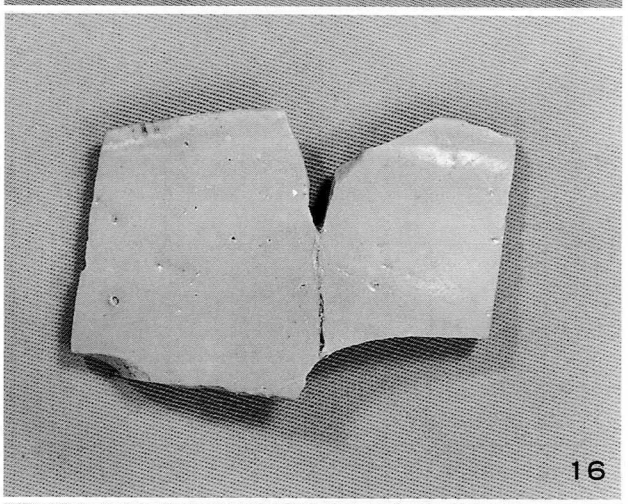


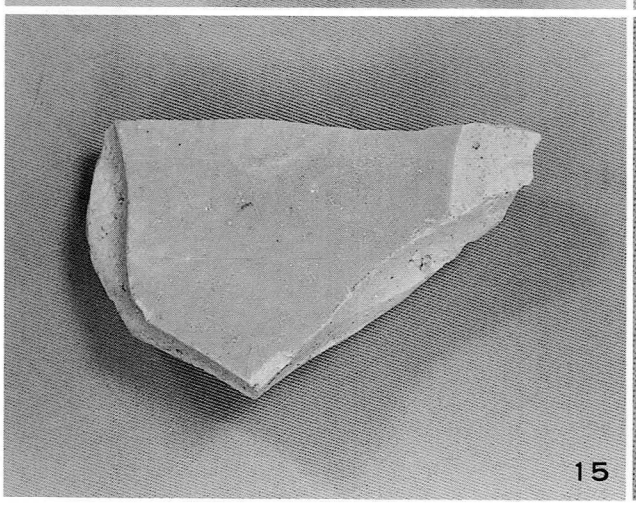


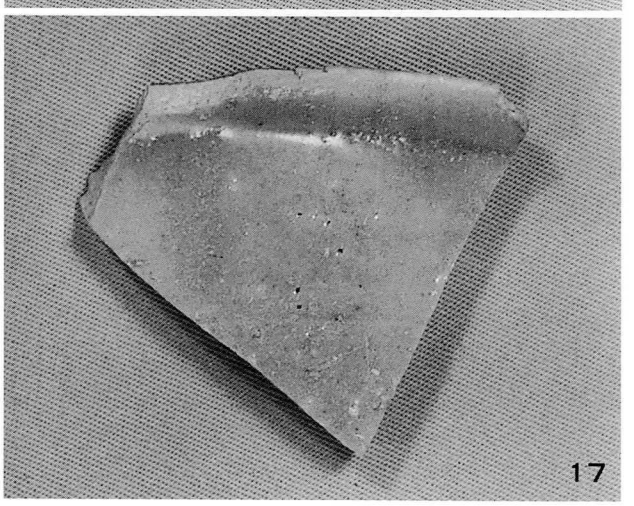






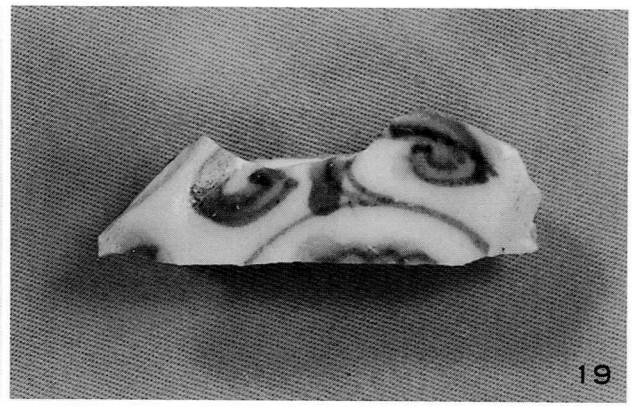


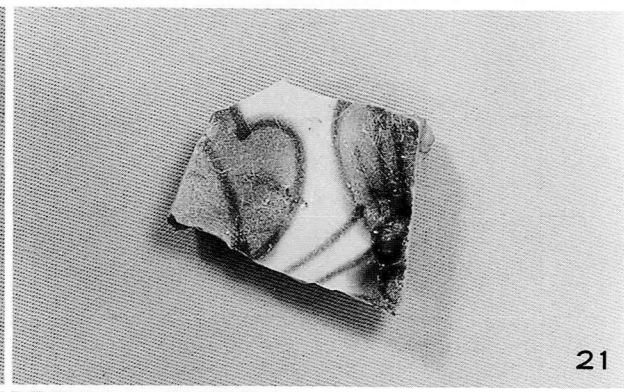


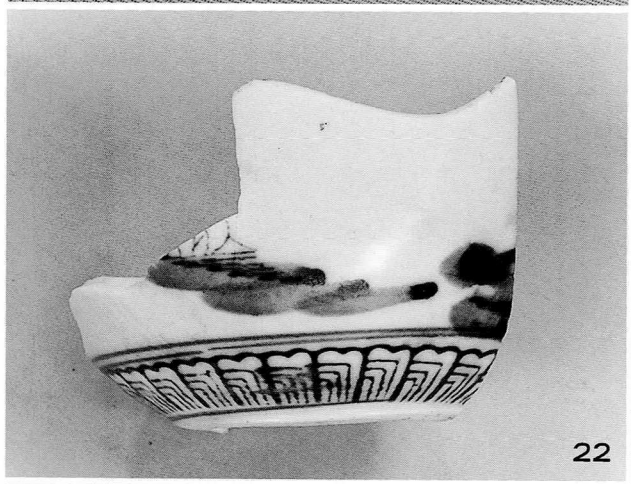


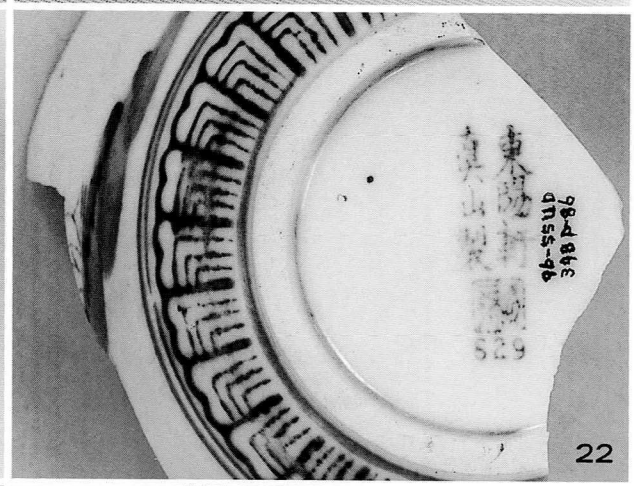
SD-6001(4)、SX-2103(5、6)、SK-2103(12)、包含層第32層(14)、包含層第11層(15)、包含層第23・24層(16)、包含層第10層(17)

図版13　出土遺物



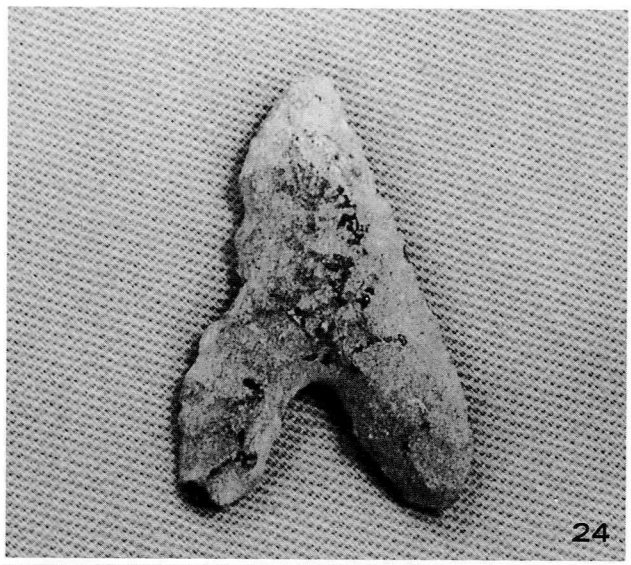


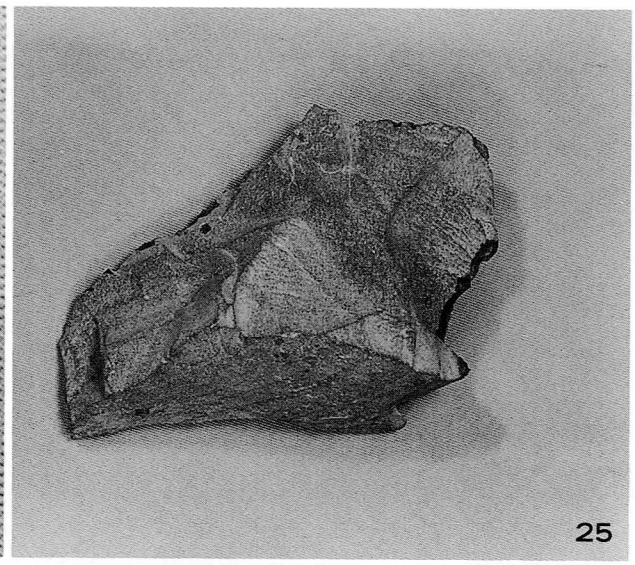


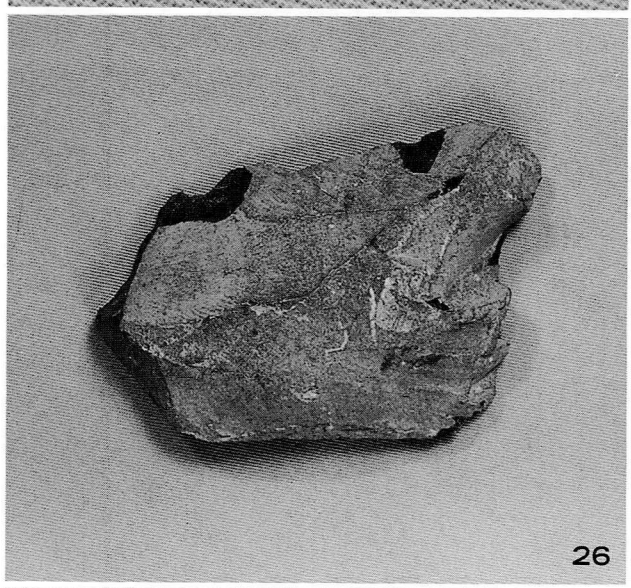


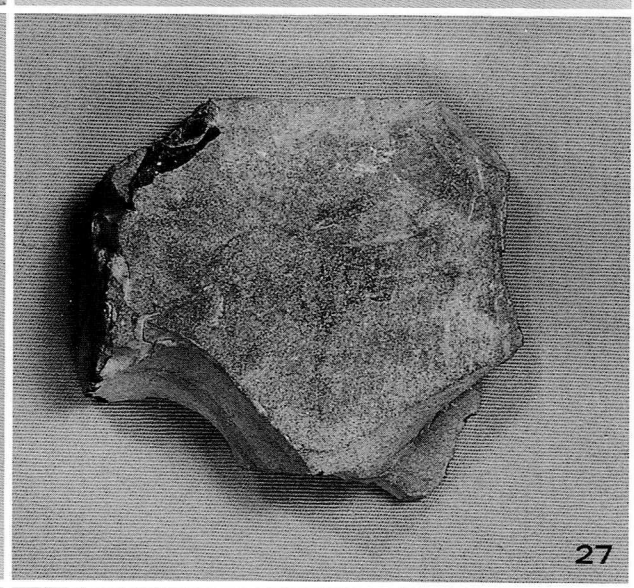
田耕作土(18)、青花(19～21)、現代磁器(22、23)

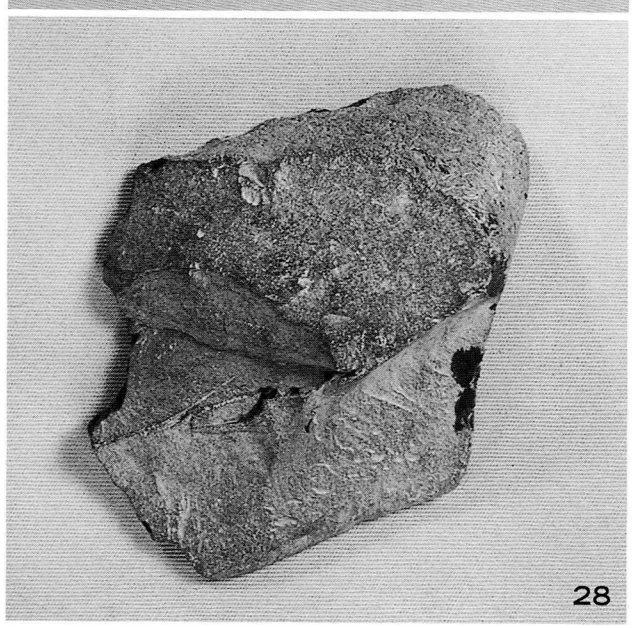
図版14　出土遺物


24


25


26


27


28

29

石製品

報告書抄録

ふりがな	うみづかいせきはつくつちようさがいよう
書名	海塚遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 45 集
編著者名	前川 浩一、松本 武志
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号 TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
うみずかいせき 海塚遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 うみづか 海塚	27208	110	34度 26分	135度 21分	19970113 19970331	982	礼拝所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うみづかいせき 海塚遺跡	集落跡	縄文時代 古代 中世 近世	溝、土坑	瓦器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第45集

海塚遺跡発掘調査概要

発 行 日　平成10年3月31日
編集・発行　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1－17－1
印　　刷　摂河泉文庫
　　大阪府貝塚市北町20－18